

研究題目 ふるさと甚目寺 ～人や地域を思いやる心を育む ESD の実践を通して～

研究要項

1 研究のねらい

ESD とは、「持続可能な発展のための教育」と訳され、「持続可能な社会の担い手を育む教育」と言える。本校は、ESD の取組を行って 3 年目となる。1 年目は、ESD の視点から、今まで以上に人や地域に積極的にかかわろう、伝えよう、つながろうとする姿勢を育んできた。ここでいう地域とは、学区を中心とした甚目寺地区をさす。2 年目は、話し合い活動の充実を図り、子どもたちがより主体的に ESD の取組を行えるようにした。

その結果、全校児童を対象とした昨年度末の ESD 事後アンケートでは、「甚目寺をすばらしい町、よい町だと思いますか」「甚目寺を自分の『ふるさと』として、大切にしたいと思いますか」の質問には、約 7 割の児童が「そう思う」と答え、一定の成果が得られた。一方、「甚目寺の現在や未来のために何か考えたり、行動したりしたいと思いますか」という質問には、3 割強の児童が「そう思う」と答えたのみであった。子どもたちは様々な取組を行い、ふるさとを大切に思うようになってきたが、自発的に行動に移そうとするまでの気持ちには十分至っておらず、ふるさとを心から思う気持ちの伴った取組とは言い難いという問題点が見えてきた。これまでの取組の中だけでは、じっくりと地域の将来、地域の人の将来、その地域の発展にかかわる自分の将来について考えることは難しいと感じた。

そこで、本年度は行動面に重点をおきがちであった取組を見直し、情意面と行動面の両面から見て、取組を考えていくことにした。つまり、ESD の取組を行う中で、要所に道德の時間を設け、ESD と道德の連携を強化する。そして、道德の時間では思いやりや郷土愛をテーマとした題材を中心に扱い、ESD に必要な情意面を育てることにした。このように、情意面と行動面を計画的に育てることで、この地域を将来的にも持続発展させていくために、将来、地域の主役となる子どもの育成をはかっていきたい。

本年度の 5 年生では、地域の産業に目を向けて ESD の取組を行う。地域の産業には、長い伝統を受け継いでいる店、世界に誇る技術をもつ工場、地元の農産物を熱心に育てている農家など様々なものがある。そこで、地域の産業を調べるだけでなく、道德の時間などを用いて、道德的心情を高めつつ、地域の産業を担っている人々の思いや工夫、努力、協力にも目を向け、地域の人の活動に誇りをもたせたい。そして、それをどのように受け継ぎ、伝え、地域とつながっていくのかを考え、行動させていきたい。

2 研究の仮説と方法

(1) 研究仮説

目指す児童像を次のように掲げ、研究のねらいをもとに研究仮説を設定した。

目指す児童像

- I 地域の産業にかかわる人、もの、ことに興味関心をもち、主体的にかかわる児童
- II 互いを認め、尊重し合い、人の気持ちや思いに気づき、地域の将来のためによりよく行動できる児童



4 実践内容（5年生の実践）

（1）道徳の授業「ひとりぼっちの あの子」・・・仮説Ⅱに対しての手立て③、⑤

学級での仲間づくりのため、思いやりをテーマとした自作教材の選定を行った。宮沢章二氏の詩「ひとりぼっちの あの子」と書籍「行為の意味 青春前期のきみたちに」の中の詩を用いて、“思いやり”の意味について考えさせた。

ワークシートでは、詩の中において、相手の気持ちを表す言葉を隠して考えさせ、その後の思いやりについて考える時に想像しやすいようにした。

（2）総合的な学習の時間「刷毛の出前授業」・・・仮説Ⅰに対しての手だて①

甚目寺地区に古くから伝わる伝統産業である刷毛についての学習を、甚目寺の産業についてこれから学習していく総合の取組の先駆けとして設定した。

社会科で4年生まで使っていた副読本を用いて、刷毛について簡単な学習を行った。そして、5月に刷毛組合の方々による出前授業を実施した。甚目寺の刷毛づくりの基礎を築いた山崎政三郎さんの業績、刷毛を作る上で大切な動物の毛の種類や毛の組み合わせ方、刷毛作りの工程などを学習した。さらに、甚目寺が日本一の刷毛生産地であること、刷毛産業が外国製品の台頭や後継者問題など厳しい状況にあること、料理や塗装などの専門家の仕事を甚目寺の刷毛が支えていることなどについて知った。

児童らは、この甚目寺地区で100年以上前から行われている刷毛づくりの歴史に驚いたり、様々な毛で作られた刷毛を触って感触を確かめたりしていた。この学習を通して、「初め、甚目寺の昔からの伝統的な産業が刷毛だと聞いて『微妙…』と思ったけど、話を聞いたら歴史があつてとてもすごいものなんだと分かった」や「直接、刷毛の毛を触らせてもらって、気持ちよかったり、ざらざらしたりするものがあった」、「刷毛を作っている人が少ないと聞いたので、早く大人になって手伝いたいと思った」といった感想が見られた。刷毛にかかわっている人から直接話を聞いたり、実際に刷毛に触ったりした活動を通して、甚目寺の伝統産業である刷毛に興味をもって、5年生の総合学習に取りかかることができたようだ。



【刷毛の出前授業】



【山羊の毛を実際に触る】

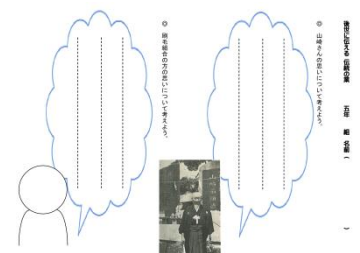
（3）道徳の授業「後世に伝える 伝統の業」・・・仮説Ⅱに対しての手だて④、⑤

刷毛の出前授業を受けて、次は情緒面を強化するための道徳の授業を行った。刷毛の産業について、その刷毛づくりにかかわる人々の思いに焦点をあて、授業を構成した。

授業の流れとして、導入では、刷毛の出前授業で学習したことを復習し、その中でも刷毛にかかわる人の思いを探っていくことを伝えた。展開では、最初に、社会科の副読本や甚目寺町史から抜粋したもので作った甚目寺における刷毛の創始者、山崎政三郎さんに関する資料をもとに、山崎さんの思いについて考えた。刷毛づくりをふるさとに伝えるために、たくさんの努力をした山崎さんは、どんな思いをもっていたのかという発問に対し、「ふるさとのために貢献できて良かった」、「自分がいなくなった後ももっともっと広めてほしい」という思いを考えることができた。次に、現在、刷毛づくりに担っている刷毛組合の方にインタビューをし、ビデオを撮ったものを教材として活用した。そこでは、インタビューの言葉の中から、『後世に伝えていきたい』という言葉を取り上げ、その言葉について考えることで、刷毛づくりという伝統産業を今に受け継いでいる人々の思いに迫っていった。自分の考えを書く場面では、人の思いが想像しやすいように吹き出しをつけたワークシートを活用した。そして、話し合い活動を2段階に分けて、近くの者同士で考えを交流した話し合いを行った後に、全体発表を行った。全体発表では、全員の考えをまんべんなく出させるために、全員を立たせ、同じ考えが発表



【考えを書く時の机間指導】



【吹き出しを活用したワークシート】

された時には着席するという発表方法をとった。自分の考えを発表することはもちろん、人の考えを受けて着席することも意思表示の1つであることを前提としている。児童は刷毛づくりを受け継いでいる人々の思いを「今でも甚目寺の刷毛は有名だけれども、自分たちがもっとがんばって、もっと有名になるようにしよう」や「約 100 年前から受け継がれてきた刷毛づくりだから、また 50 年、100 年後まで受け継いでくれたらいいなあ」と考え、これからの刷毛づくりについて思いを巡らすことができた。最後に、この授業で自分が感じたことを交流した。児童からは「山崎さんの思いが、今の刷毛づくりにつながった。今の刷毛組合の方の気持ちがそうだ」や「山崎さんも刷毛組合の方も、後世に伝えたいと思っている」、「産業にかかわっている人達のメッセージは、全部気持ちがこもっていることがよく分かった」、「これから人の思いを考えながら、総合を勉強していきたい」という感想が挙げられた。授業の終わりには、甚目寺で 53 年前から和菓子屋を営んでいるとくら総本店の店主の方に、事前にいただいた手紙を読み上げ、地域のために伝統を守っていききたい、もっと携わる仕事を盛り上げていききたいという思いは、どの産業においても同じであることを確認した。

この授業では、刷毛を甚目寺に伝えた山崎さんの思い（過去）、今に伝統を受け継いでいる刷毛組合の方々の思い（現在）、将来、この地域の主役となる子ども達の感想（未来）というように、時代を追って、刷毛にかかわっている人達の思いを考えた。これから甚目寺の様々な産業を調べていく課程で、その産業の内容について知るだけでなく、目に見えないものである産業にかかわる人達の思いにも焦点をあてて調べていききたいという視点をつくることができた。また、ゲストティーチャーによる道徳の授業は、その人の思いを直に感じることができるため、思いを考えさせるという活動に対して、とても有効であった。

(4)総合的な学習の時間「ミニ発表会をしよう」・・・仮説Ⅰに対しての手だて○、○

これまでの刷毛の学習をもとに、甚目寺地区の他の 15 種の産業、農業では JA、小松菜、方領大根、商業では商工会、とくら総本店（和菓子）、舩文製菓（和菓子）、龍鳳堂（線香）、こんにやく米勇（こんにやく）、伊藤豊店（豊屋）、馬場鮮魚店（魚屋）、工業ではアイカ工業（樹脂製品）、石光工業（車部品）、佐藤工業（車部品）、タンゲ化学（化学製品）、刷毛組合について、簡単なオリエンテーションをし、その中でも、インターネットやパンフレットを使って資料の得られた JA、小松菜、方領大根、商工会、舩文製菓、アイカ工業、石光工業、佐藤工業、タンゲ化学、刷毛組合について、興味をもった産業を 1 つ仮決定し、分かれて調べ学習を行った。資料をもとに、その産業について調べ、ノートに自分なりにまとめていった。その後、総合的な学習の時間で発表の機会を設けた。このミニ発表会を通して、様々な地域産業についての知識を高めるとともに、興味関心をもちたい。さらに、夏休みの取材活動、夏休み以後の活動の見通しをもたせ、意欲をもって取り組んでいけることを目的とした。そして、この授業後に今後 1 年かけて調査し、発信し、応援していく産業を決定する。

調べ学習をもとにして、総合的な学習の時間でミニ発表会を行った。まず、自分が調べたことについて、分かりやすいよう短い言葉で付箋紙に書き出した。次に、より深い発表ができるよう付箋紙を持ち寄って、同じ産業を調べた者同士で話し合いを行った。ここにおける話し合いでは、シンキングツールを用いた。X チャートを使い、調べたことを「仕事内容」「歴史」「誇れること」「人の思い」の 4 つに分類しながら、付箋紙を貼っていく。このことにより、同じ産業を調べた者同



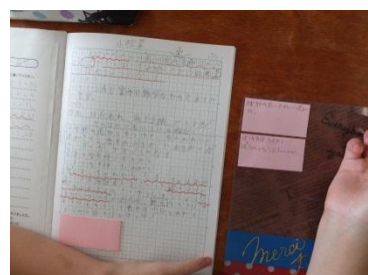
【近くの人との話し合い】



【全員が立つ全体発表】



【和菓子屋さんの手紙】



【付箋紙に書き出す】



【Xチャートで分類】

士、調べたことを共有し合うことができ、調べたことを見える形で分類してまとめることができる。児童らは、付箋紙に書いた内容が、4つの項目の内、どれになるのか話し合いながら分類することができた。

そして全体でミニ発表会を開き、グループの代表者が発表をした。分類したXチャートを見ることにより、「〇〇（産業）の仕事内容（歴史・誇り・人の思い）は、～（付箋紙に書かれた内容）です。」といったように、項目別に分かりやすく発表することができた。さらに、目に見える形で分類したので、「Xチャートの中の『人の思い』については付箋紙が少ない」、つまり「調べ学習だけでは『人の思い』についてはなかなか迫れない」、だから「夏休みの取材活動で『人の思い』を重点的に取材しなければならない」という見通しをもつことができた。



【Xチャートを見ながら発表】

授業後、今回のミニ発表会を聞いて、児童はどの地域産業についても知識を得ることができた。そして、これから1年間かかわっていきたいと思う産業を選んだ。初めに選んだ産業から変わらなかった児童が21人、その理由を「資料だけでは分からないことを、もっと詳しく知りたいから」「人の思いが班で出なかったから、それをもっと調べたい」と書いた。他の産業の発表を受けて調べたい産業が変わった児童が12人、「自分が調べたところ以外で、歴史や仕事、誇れることや人の思いを聞いて、とても気になったから」といった理由をもった。このことを受け、1年間かかわっていく産業を決定した。

(5)総合的な学習・地域の産業についての取材学習・・・仮説Ⅰに対しての手だて②

夏休みを迎える前に、取材の方法や取材内容について考えた。取材の方法としては、特別活動で行ったハッピートークトレーニングで学習したことをもとに、相手を思いやる気持ちで、あいさつや礼儀正しい言葉遣いをするについて確認した。取材内容については、総合的な学習の時間で分類したXチャートをもとに、調べ学習だけでは分からなかった「仕事内容」「歴史」「誇れるところ」「人の思い」を話し合い、質問として考えた。



【Xチャートを見て質問を考える】

夏休み中の取材は、7月下旬～8月上旬にかけて行った。企業や商店とは教師側で連絡を取り、1つの取材先に対して5～8人で1～2時間程度、取材をさせていただいた。夏休みを利用した取材は、商業のとくら総本店、舁文製菓、龍鳳堂、こんにやく米勇、伊藤豊店、馬場鮮魚店、工業のアイカ工業、石光工業、佐藤工業、タンゲ化学、刷毛組合で行い、農業などその他の産業は2学期に取材活動を行う予定である。

それぞれ取材に行った先では、実際の製品を見て触ったり、工場で機械を動かして製造しているところを見学したりした。さらに、和菓子屋の舁文では実際に和菓子づくりを体験したり、タンゲ化学では未発売の新製品をいち早く見て、製品の特徴を教えてもらったりすることができた。本物に触れる体験は、児童にとって大変興味深く、たくさんの知識を得ることもつながった。



【実物を見せていただく】

今回の取材で重点を置いていた「人の思い」についても、道德の時間で、産業にかかわる人達の思いを探っていこうと視点を示したため、児童も「この会社をやっていて、誇れることはどんなことですか」や「同じ地域で長い間、お店をやっていて、どんな思いですか」など、「人の思い」についての質問をたくさんすることができた。加えて、直接取材に行き、実際に産業にかかわっている人達の話している姿を見て、熱い思いを聞くことで、作っているもの、携わっている人への思いを肌で感じることもできた。このことは、産業の内容だけでなく人の思いも調べていこうという課題を満たし、さらに言葉としてだけでなく、話していた時の姿や印象から感覚的に人の思いを感じることもでき、取材として大きな意義があったように感じる。



【和菓子作り体験】

5 2・3学期の取組について

(1)総合学習発表会

2学期は、11月に発表会がある。そこでは、保護者を中心とした地域の人々へ、地域産業について発信していく。また、お世話になった産業の方々にも招待状を送り、来校していただく予定である。

まとめの作業では、資料で調べたことと取材したことについて、これまでの課程で行ってきたように項目ごとに分けてまとめていく。発表会は、ポスターセッションや寸劇やペープサートなど、様々な形式で行う。自分がかかわった産業について、その内容を知らせるとともに、今年度、重点を置いた産業にかかわる「人の思い」についても発信していく。

(2)地域産業を応援する

これまでは、自分たちがかかわってきた産業を調べ、知り、発信してきたが、3学期からは自分たちが自ら行動して応援していく活動に移る。具体的な取組では、甚目寺観音で毎月12日に行われる「てづくり朝市」の2月の朝市に甚目寺小学校の5年生として、お店を出店するというものがある。そこで、甚目寺の産業や特産物を紹介したり、自分たちで育てた小松菜や方領大根、校庭で実ったレモン、自分たちで作った小物などを販売したりする。甚目寺の産業について発信するとともに、自分たちで栽培したもの、作ったものを販売するという産業にかかわる活動に触れることができる。

6 成果と課題

(1)成果

①仮説Ⅰへの取組について

出前授業や取材活動を通して、実物を見たり、触ったりすることができた。また、取材活動では、進んで質問したり、体験したりするなど、自ら働きかけることができた。それにより、4月当初、甚目寺の産業について、大半の児童がほとんど分からないと回答していたが、現在では、自分が取材に行った産業はもちろん、様々な産業調べ、発表に主体的に取り組むことができた。

②仮説Ⅱへの取組について

主に道徳の時間を利用して、ふるさと甚目寺に対する情緒面を養ってきた。実践の要所で、産業の内容に触れるだけでなく、それに携わっている人々の思いにまで考えを至らせているところは、道徳の実践の成果であると考えられる。

③取組全体として

総合的な学習の時間では行動面、道徳では情緒面と取組を行ってきたが、共に関連づけ合いながら取組を進めることができた。総合の取組の中で、「人の思いに重点を置いて調べていきたい」とする考えもその成果である。

また、このような他教科にまたがる授業の実践を通して、授業をすべて単発的に考えるのではなく、つながっているものであるという意識を児童にもたせることができた。児童の中には、社会科で米作りに関する単元を行った時にも、「総合でやっている農業と関係してくるね」といったような視点をもつ者もいた。これは、ESDカレンダーの中に包括されている教材のつながりにあたり、それを児童に気づかせることができた。

さらに、話し合いにおいてシンキングツールを用いたことにより、視覚的に見やすく分類するという役割だけでなく、新しく課題を見つけるという別の役割において、シンキングツールの価値を見いだすことができた。話し合いの結果が明確に見えることから、児童も課題を「人の思い」と位置づけ、主体的に活動することができたと考えられる。

(2)課題

ESDの取組と関連づけた道徳の題材を設定するため、自作教材の作成や行う時期が課題となった。自作教材の作成には時間がかかり、また、ESDの取組と道徳の題材の関係から適当な時期に行わなければならない。その点において、年間指導計画やESDカレンダーをもとに事前にしっかりと計画をたてなければならなかった。

また、ESDの取組は2学期以降も継続して行われる。道徳的心情を高めながら、取り組んでいけるよう、引き続き、道徳との連携を図っていきたい。